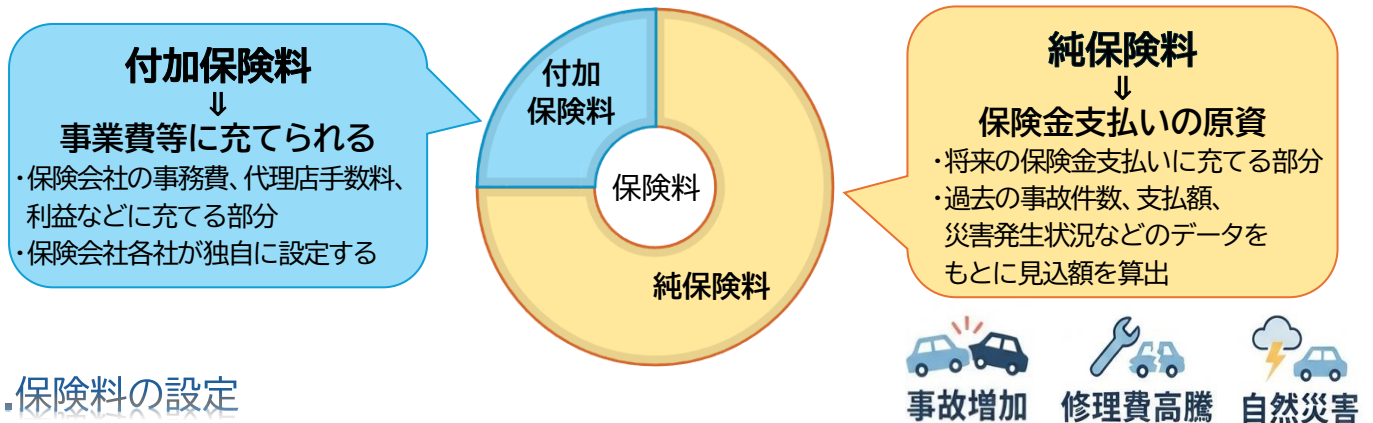


「また今年も保険料が上がっている…」更新通知をみて、ため息をついてしまった経験はありませんか？毎年のように値上がりが続いている損害保険料。なぜこれほど保険料は上がり続けているのでしょうか？その裏側にある仕組みと、これからの動向を分かりやすく紐解いていきます。

1. 保険料の構成要素

保険料は純保険料と付加保険料の2つの要素で構成されています。



2. 保険料の設定

・条件による保険料の違い

保険料は、補償内容の広さや保険金額、契約期間だけではなく、対象のリスクの大きさや過去の事故歴・利用実績などによって変わります。

【例】：自動車保険では車種・用途・地域・年齢条件・等級によって保険料が変わる。
等級制度では無事故が続くと割引が大きくなる。

・「参考純率」・「基準料率」の存在

日本では「損害保険料率算出機構」という非営利の組織が、過去のデータをもとに「参考純率」や「基準料率」を算出しています。

・保険会社各社の保険料設定

保険会社は参考純率や基準料率を参考にしつつ、最終的な保険料を決定します。
特に運営コストにあたる「付加保険料」の部分は、会社ごとに差が出やすくなります。
事故が起きる確率と、起きた時の損害額を見積り、その上に事業コストを乗せて保険料を決めるという考え方です。



3. 直近の動きと今後の見直し

・参考純率の引き上げ(2026年6月)

損害保険料率算出機構は、金融庁長官へ参考純率の変更を届け出ました。
これにより、自動車保険の参考純率水準は平均14.4%引き上げられます。
また、安全運転を行うことで保険料の割引が受けられる「運転者の運行特性を保険料に反映する料率区分」が新設されました。



・今後の傾向

参考純率の引き上げは、即保険料の引き上げに繋がるとは言い切れませんが、各保険会社が保険料を決める際の参考にする数値ですので、今後も保険料引き上げ傾向は続いていくものと推測されます。

